

平成21年5月29日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520526
研究課題名（和文） 故実書類の調査を基礎とする日本中世狩猟文化史の研究
研究課題名（英文） Study of the Japanese medieval hunting culture history: based on the investigation of old customs and manners documents
研究代表者
中澤 克昭（NAKAZAWA KATSUAKI）
長野工業高等専門学校・准教授
研究者番号：703320202

研究成果の概要：鷹狩の故実書や獣を獲物とする狩猟の故実書、さらに弓馬儀礼の故実書などを調査し、その他の記録・文書とあわせて、日本中世における狩猟文化を総合的に解明した。王朝の狩猟文化、特に天皇・院・摂関の権力と鷹狩の関係を探るとともに、武士の狩猟文化、特に武家首長の狩猟儀礼についても再考。鷹道を家業とする公家の実態も探り、中世における権力と狩猟の関係を、総合的かつ通史的に把握できるようになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	510,000	3,410,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：中世史、文化史、狩猟、故実書、鷹狩

## 1. 研究開始当初の背景

(1)鳥インフルエンザなど動物起源の恐怖と、グローバル化によるそれらの蔓延は、20世紀までの人類が経験したことのない規模と速度で私たちを震撼させるようになった。牛海綿状脳症（BSE）、鯉ヘルペスなど飼育動物に発生した問題も深刻である。日本国内では、クマと人の事故やシカの食害などが急増しており、人と動物の関係には再考すべき問題が少なくない。両者の関係を考える時、これ

まで人は動物たちとどのような関係を構築してきたのかという歴史を把握しておくことは不可欠で、この研究は、そうした人と動物の関係史研究の一環として構想した。

(2)人と動物の関係のなかでも狩猟は、日本の文化を考える上で重要な切り口になる。中国大陸や朝鮮半島では食用畜産が発達し、狩猟も盛んに行なわれたが、日本では食用畜産が発達せず、中世には肉食の禁忌が強まった。

食用畜産が発達しなかったからといって、狩猟文化も発達しなかったわけではない。日本では、野生動物とそれを捕獲する狩猟に、独特の価値が発達した。例えば鳥の場合、飼育された鶏と捕獲された雉などの野鳥との間には様々な文化的差異がみられ、特に鷹狩とその獲物に関する言説は豊富である。

(3) 古今東西、狩猟は権力のメタファーであり、日本でも狩猟は重要な政治文化であった。「穢」観念や殺生罪業観が強まった日本中世において、狩猟と権力の関係はどのような展開をみせるのか。日本史学においては、古代の王権と狩猟に関する研究や、近世の将軍の鷹場に関する研究などは行なわれてきたが、中世の狩猟文化そのものについて正面から探ろうとする研究はほとんどなかった。

## 2. 研究の目的

(1) この研究では、獣を獲物とする狩猟だけでなく、鷹狩や笠懸などの武芸における供犠まで視野に入れ、さらに公家文化としての狩猟（鷹狩）とあわせて、中世における狩猟文化を総合的に考えたい。

(2) その際、故実書類の調査を基礎とする点が、この研究の最大の特色である。故実書をテキストとした有職故実研究には長い歴史と蓄積があるものの、そこに人と動物の関係史という視点は無かった。テキスト化された故実をテキストどおりに理解するだけでなく、動物とのつきあい方、テキストに内在する動物観やその変化をも探りたい。

(3) 中世には多数の鷹狩故実書が生み出された。また、弓矢で鹿などの獣を狩る狩猟の故実書も存在する。さらに、武家の弓馬故実書のなかには、狩猟やその獲物の利用に関する故実が含まれている。それらを、例えば「鷹書のみ」というように限定せず、狩猟に関する言説を総合的に調査・研究する。

## 3. 研究の方法

研究は、つぎの4段階に分けられる。

(1) 狩猟に関する故実書類の調査。

(2) 調査・収集した故実書の解読・分析。

(3) 故実書以外の古記録・古文書を調査し、狩猟に関する史料を抽出。

(4) 総合的な考察。

(1) 調査対象となる故実書類は、つぎの3つに大別できる。

(a) 公家の鷹狩故実書

(b) 武家の鷹狩故実書

(c) 武家の弓馬故実書（獣猟を含む）

(a) としては、西園寺家あるいは持明院家に関係する鷹書の存在が知られている。特に、持明院家は13世紀にさかのぼる鷹書があり、近世に至っても鷹故実の家として知られていた。その故実の概要・生成過程・テキスト化・学習・流布などについて探りたい。前田育徳会尊経閣文庫に所蔵されている鷹狩故実書のなかには、両家に関係するものがあり、重要な調査対象となる。

また、立命館大学図書館が所蔵する西園寺文庫にも、20冊以上の鷹書が所蔵されている。公家の鷹狩故実、特に西園寺家について探る上で重要な史料群になると予想される。

(b) の武家の鷹狩故実書としては、尊経閣文庫・宮内庁書陵部・国立公文書館などに所蔵されている諏訪流に関する鷹書がある。諏訪を称する故実書類のなかには、京都諏訪氏が相伝した故実も含まれていると予想され、そこから室町の将軍周辺の鷹狩文化について探る手がかりも得られよう。

(c) の武家の弓馬故実書については、尊経閣文庫に所蔵されている『狩詞』等の狩猟故実書の分析を進めるとともに、矢開(箭祭)をはじめとする狩猟儀礼や笠懸などの武芸にもなう動物供犠にも着目する。(a)および(b)との関係に注意しながら解読し、狩猟文化を偏り無く考えたい。

尊経閣文庫とあわせて、お茶の水図書館（成篁堂文庫）所蔵の小笠原家本の故実書類の調査も必要である。このなかには「聞書」あるいは「日記」と題される文書も含まれており、それらは故実書としてまとめられる以前の形態を伝えるものと考えられる。小笠原流故実の形成は15世紀以降のこととされるが（二木謙一『中世武家儀礼の研究』）、この「聞書」・「日記」の分析によって、15世紀以前からの故実の伝承過程やテキスト化について、再考が可能になるだろう。

この際、国立公文書館に所蔵されている小笠原流の故実書も調査しておきたい。従来、それは近世の写本ばかりであるから、中世を探る史料には適さないとされ、中世の狩猟文化の研究のために調査されることもなかった。しかし、『小笠原礼書』など、江戸時代に小笠原家から将軍に献上され、江戸城内の紅葉山文庫に収蔵されていた故実書群の中には、古態をとどめる記述が含まれている可能性もあり、これらを調査することで、中世から近世へ、どのように故実が相伝されたのか、その流れもみえてくるだろう。

(2) 調査・収集した故実書類の解説・分析を行なう。上記調査と並行して、有職故実・日本中世史・日本近世史・狩猟民俗などに関する図書を参照しながら、調査・収集した故実書類の解説・分析を行ないたい。

(3) 故実書以外の古記録・古文書類を調査し、狩猟に関する史料を抽出する。中世・近世、特に室町・戦国期の古記録を精査して、狩猟に関する史料を抽出する。そして、その成果を故実書の調査・分析の成果と照合する。

(4) それらを総合的に考察する。調査の成果は随時、論文・口頭報告などによって発表する予定であるが、それらを総合し、この研究の成果としてまとめたい。

#### 4. 研究成果

(1) 故実書類、古記録・古文書などから狩猟に関する史料を抽出し、中世の狩猟文化について考察を深めた。特に、古記録・説話などから王朝貴族の鷹狩に関する史料を集め、狩猟の実態と言説化について考え、その成果の一部を、古代文学会で報告した（「野生の価値と権力—王朝の狩猟とその言説—」『古代文学』46、2006年）。また、京都女子大学宗教・文化研究所の公開講座でも、この成果の一部を公表した（「王朝の狩猟文化—撰関・天皇・院の権力と野生—」京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』22、2009年）。

(2) 鷹狩だけでなく、獣を獲物とする狩猟の通史的な把握にもつとめ、鷹狩との関係を整理して、論文「日本中世狩猟文化史論序説」（『狩猟と供犠の文化誌』森話社、2007年）にまとめた。さらに新たな知見をふまえ、中世の権力と狩猟の関係や、中世から近世への見通しについてまとめた論文「狩る王の系譜」を編著『人と動物の日本史〈2〉歴史のなかの動物たち』（吉川弘文館）に発表した。これにより、各時期における権力と狩猟文化の関係が鮮明になったはずである。

(3) 鷹故実を伝えた公家として知られてきた持明院家と西園寺家について考察を深めた。従来、持明院家は院政期から鷹を家業とし、13世紀末の奥書をもつ『基盛朝臣鷹狩記』は持明院基盛の著作だと理解されてきた。確かに同家は近世に「鷹の家」として知られていたが、尊経閣文庫に所蔵されている鷹書をはじめ、持明院家および西園寺家に関する諸史料を調査・分析したところ、従来の理解とは異なる新たな知見が得られた。

鎌倉期には西園寺家に鷹狩を好んだ人もいたようだが、書名に「西園寺家」とある鷹書であっても、中世にさかのぼる写本には持明院家に伝来したものが少ない。尊経閣

文庫に所蔵されている鷹書には、16世紀の持明院基春・基規が書写したもの（またはその写本）があり、それらや静嘉堂文庫などに所蔵されている鷹書を調査し、系図類・古記録類などとあわせて、持明院家の歴史と鷹書の関係を考察した。その結果、これまで持明院基盛の著作とされてきた『基盛朝臣鷹狩記』が、実は基盛の著作ではなく、他家の人物の著作であること、院政期に持明院家の祖が鷹道を家業としていたという説も、後世の『尊卑分脈』の注記以外に根拠がないこと、16世紀の持明院基春・基規らが、いくつもの鷹書を書写、自らも鷹書を著述し、鷹道を自家の家業にしようとしていたと考えられることなどをあきらかにした。この成果の一部は、立命館大学の鷹書に関する研究会で口頭報告しており、詳細は近日中に論文として公表する予定である。

なお、立命館大学図書館西園寺文庫の鷹書群は、二本松泰子氏らによって調査が進められている。

(4) 武家の狩猟儀礼、特に武家首長の代表的な狩猟儀礼である矢開（箭祭）の変化について考察を深めた。お茶の水図書館（成篁堂文庫）に含まれる小笠原家本の故実書『矢開之次第』および『矢開事』を調査したところ、『矢開之次第』は室町時代中期のものともみられ、群書類従本『矢開事』とは異なる内容を含む貴重な本であることがあきらかになった。蜷川家本『矢開之次第』と一致する部分が多いものの、より詳しく、古態を伝えているものと思われる。それらと尊経閣文庫所蔵『矢開日記』などをあわせて分析し、武家首長の狩猟儀礼がどのように変化したかを解明し、中世から近世への見通しもたてた。この成果は、論文「武家の狩猟と矢開の変化」（『論集東国信濃の古代中世史』岩田書院）として公表した。

さらに、国立公文書館で近世の故実書『小笠原礼書』『諸家故実集』『伊勢弓馬叢書』などを調査した。従来、それらは近世の本であるから、中世を探る史料には適さないと言われてきたが、例えば、『小笠原礼書』に含まれる「矢披之事」は、鎌倉末期の北条得宗家の矢開故実を伝えており、また、『諸家故実集』に含まれる「贅懸様之事」は、中世の武芸における供儀の様子を伝えている。いずれも、中世の狩猟文化を解明するための貴重な史料であり、近世の故実書を解読することで、そうした貴重な情報を発掘できることもあきらかになった。

(5) このような文献史学の成果と隣接する他の研究領域の成果とを総合して、中世における人と動物の諸関係を考えるため、考古学と中世史研究会主催の考古学と中世史シンポジウムにおいて、「動物と中世社会—捕獲・加工・消費—」をテーマとするよう提案し、2008年7月に実現した。その際、この研究で得られた知見をふまえて、「シンポジウム「動物と中世社会」の可能性」と題する問題提起を行なった。このシンポの報告書は、近日刊行予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

中澤克昭、野生の価値と権力—王朝の狩猟とその言説—、古代文学、46、35～42、2006、査読無

中澤克昭、王朝の狩猟文化—撰関・天皇・院の権力と野生—、京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要、22、55～62、2009、査読無

〔学会発表〕（計1件）

中澤克昭、問題提起—シンポジウム「動物と中世社会」の可能性—、第6回考古学と中世史シンポジウム「動物と中世社会—捕獲・加工・消費—」、2008.7、帝京大学山梨文化財研究所

[図書] (計4件)

小野正敏・萩原三雄・中澤克昭、高志書院、鎌倉時代の考古学、2006、95～106

中村生雄・三浦佑之・赤坂憲雄・中澤克昭、森話社、狩猟と供犠の文化誌、2007、91～122

井原今朝男・牛山佳幸・中澤克昭、岩田書院、論集東国信濃の古代中世史、2008、183～212

中澤克昭、吉川弘文館、人と動物の日本史〈2〉歴史のなかの動物たち、2009、270

[その他] (計1件)

中澤克昭、戦国大名の鷹狩り、新潟県立歴史博物館、「天地人リレー講演会」記録集、135～149、2009.2

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中澤 克昭 (NAKAZAWA KATSUAKI)

長野工業高等専門学校・准教授

研究者番号：703320202

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし